

2026年奨学生総評

林 桂

○入選した応募の中から、林が推薦した作者、作品の評を以下に。(順不同)

●さいう●(大学生)

いやほん
を
外せば耳朶は冷えていて
きおくの果てへ降る夕まぐれ

月光
は
白磁のにおい
身ひとつで彼岸の銀河鉄道めざす

終電にきみ
を
見送り帰る日の
ひょうりゅうびんのような星空

羽を挽ぐ
骨
のうごきを見つめれば
此世の森に揺れる野葡萄

天をやぶる
雲雀の群れの
それぞれに

とうしんだいの臓器を抱いて

齋場

へ

影を蹴りつけ向かうとき

ちきゅうはひかりまみれの樹海

うえは一す齧れば春の火の匂い

【評】短歌体を中心に、時々俳句体を書く。5行以内という募集の表記規定の中で、最も工夫された表記を採用している。前年度に比較しても、表現は洗練されてきている。最終行で新たな世界を開く。パターン化していると言えは言えるが、一編ずつ違った世界を見せる力が備わっている。

●川上真央●（大学生）

こわされた一人称で

歩くとき

あなたに解けたままの靴紐

ルイボスティー香れるままの

くちびるで

少女の囁くようなフルート

ぺんぎんが夏天に晒している十字

緑陰にわたしあるいは火の余裔

夏霧にさらし
泣きあと糖衣めく

星空のように瞳は
傷ついて
テディベアまだ
抱かれるかたち

うたうとはうったえること
丹田に
ふるえつづける水鏡がある

鼻濁音うすく伸びゆくような朝
たまごは水の声でやぶれる

初夏の陽はすこししめって
さよならのあった
別れのほうが少ない

横顔のきれいな人
を想うとき
胸をさまよう土星のひかり

めぐすりの光まぶしく
すこしだけ
溺れてみたい春風がある

野苺のかたちの
えくぼ持っていて
きみは
どこでも生き抜けそうだ

【評】短歌体を中心に俳句体も書く。甘やかな青春の作品群である。しかし、表現が甘いかといえ、それを伝える表現力は備わっている。若書きと言えば若書きだが、若書きを持つことは一生の財産ともなる。与謝野晶子が後年、自らの『みだれ髪』を改作したことは知られているが、自ら恥じた若書きを、後年獲得した表現力でも超えることはできなかった。今も若書きが流通している。後で恥ずかしくなるくらいのを、書けるときに書いておかなければならない。

●ムクロジ●(大学生)

空っ風信号全部青になれ

しゃっくりがおさまったので
帰ります

秋の蝉靴箱に靴深く入れ

鶏頭花そしてベッドの父を抱く

梅雨明けて手前の卵から使う

短夜の本におさまる栞紐

花陰にカレーは飯をまわりこむ

皮の下が腐る桜に触れている

にわたりのあしのつちいろ鼓草

三月の醤油をはじく目玉焼

【評】俳句体を中心に書く。既存の俳句の文体や世界で書ける能力は、この若い作者が最も優れているとも思える。一方、様々な試行もあり、表現世界を広げようともしている。これが成功するかどうかは今後次第であろう。自分の優れている点を殺さないで世界を広げていけるかどうか。注視してゆきたい作者だ。

● 曇理そら ● (大学生)

プリンパフェの完璧な造形を見よ
ここから先に無意識がある

在中のはんこを押してゆく夜の
事務室に押し寄せる黒うさぎ

理科準備室で準備されること以外
をずっと頑張っている

何者も傷つけながら背を伸ばし
大きな栗の木の下を出る

とおい海の写真を
レコメンドされる日に
ふたりっきりでなびかせる布

故障ならみんな許してくれるのに
躑躅をいっぱい摘む人件費

さわれない花から順に水をやる

【評】短歌体を中心に時に俳句体を書く。
自己愛なのだろうが、見つめる目はどこ
か冷たく覚めている。言葉には抒情性が
稀薄で、孤独で冷たく響く。自身の内面
が深掘りされているからだろう。

● 互井宇宙 ● (大学生)

アンドロイド漱石ひとりでに滝へ

雲丹飲んでしずかに紺となる夜空

権力うつくしいうつつ齧る柿っ！

夜を司書は古い奇書について語り
頷きながら椿は泥へ

ほらはやく月の剥製つくらなきゃ

雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される

水色のゆめに沈めるゆすらうめ

からくりに似てからみあう霞草

花曇だあれもない長廊下

【評】川柳作家なのだろう。しかし、俳句読みが読んで、優れた俳句としか読めないものも含まれている。批評性を全く感じない訳ではないが、奇想やナンセンスの文脈の方が強く感じられる。異色の存在感がある作家だ。

● 快名 ● (大学院生)

鉄橋を通過する時よく響く心よ

冷えた軌条に継ぎ目

賃貸の更新に名を書き淀む
楓がひどくゆっくり降りた

祖父の訛りに訛る
ああ、
ナナカマドが
淡い葉裏を見せてそよいだ

行くあてのない自転車の
そのままを海へ漕ぎ
どうして月がある

雪解けの川のひとつが
(借りていた本、返そうか)
合流をする

鳴り出せば減速し出すオルゴール

あの冬きみは帰省をやめた

つまずいて
ふと出した手は空を切り
広がる手押し相撲の花野

【評】時に短歌のリズムを感じさせるが、短詩体がメインの作者であろう。全体のリズムはゆったりとしていて、作品の中に読者を誘う。最後の行に詩的な仕掛けがあるが、読者を驚かせようというようなものでなく、共感と安心感を生むものとなっている。

● 大西美優 ● (大学院生)

フェミニストです、そして
黙るほどの
雪

シュプレヒコール
水檜は記憶のかたち

蓑にくるまれて金箔色のゆめ

みらべるのじゃむ
ゆらゆらと煮る
夜長

夏藤を離陸のときに思い出す

ぱいなっぐる抱いて
地下鉄
すこし泣く

どうすることもできない
白アスパラ茹でる

朧夜の
マフィンぽそぽそしてさみしい

【評】表現形式としては多彩な作者である。俳句が主体かもしれない。しかも、自由律の文体を感じさせる作品もある。内

面を掘り下げる書き方というよりは、その状況を描くことで推察させるという方法が似ているからかもしれない。

● 彩燈 琴璃 ● (大学生)

真昼間に茹で大根が透けていく
また占いは少し当たって

金色は内光りして澄む夕座

ねりあめがまだ透明で、透明で
毎日透明で、透明で

【評】短歌体と俳句体を書く。どちらもオーソドックスな文体と言えるが、感性の良さが光る。「透けていく」「内光りして」また「透明で」のリフレイン。

● 金光 舞 ● (大学生)

曙の繰り返されて花の雨

さよならの度に生き方を忘れる
明日は鳥になれますように

海の匂いにかまきりが
ひ

る

がえる

生まれてきたのは私のせい
だから三春駒の
鬣に展く花になりたい

どうすれば
上手く生きられるのだろう
柔らかい桃を冷凍してみる

心臓はみんな緋色で山躑躅

カクレクマノミが桜になってゆく

【評】俳句体から出発して、短歌体、短詩体へ表現を広げている。基本的に素直な表現が主体であり、それが魅力の作者である。生きがたさを言葉に変えている。

● 上原一樹 ● (大学生)

初夏の潮の匂いの町役場

村雨に口数多く秋なすび

花カンナ晴れているから黙りたい

ところてん吸って未来が少しくる

電柱が九月の雨に濡れている

草の花荷物少なく引越して

遠くから声で呼ばれて岸の夏

溜息のように磯巾着あるく

ケチャップを押し出すカ沈丁花

閉店の日の白菊を買ってゆく

【評】俳句表現の骨法をしっかりと身につけている。作品数は少ないが、表現が安定している。「花カンナ」「草の花」「沈丁花」など、取り合わせは俳句的にも巧みである。

●マズルカ●（大学院生）

新しい神話が呪いとなるように
子育て雑誌のまぶしい聖句

この辺にポチを埋めたの
あの秋に
いま銀桂の花を降らせて

蛍光が切れてひとつの輪となった
灯を捨てに行く日の驟雨

育児書もそよ風孕む時が来て
夕方五時の秋の古書店

未熟児の体内時計も午後を指す
いじめを許したあとの給食

「俺のため
あるんじゃないんだ天国は」
犬より安いシャンプーをかう

死ぬときは何時も一人だ
アンパンマン
だからごはんはふたりでたべる

【評】短歌体の作者。生活に密着した感性を
生かした作品が多い。生きづらさを克服する
ために書いているように見える。

● 森川 紬 ● (大学生)

パーるさいどに人魚の手形
君の住む島で雪は降ったかい

干からびた蝉退けて
夏の部品のような
ラムネ瓶を運ぶ

深海によばれるように

スロープをゆっくり降りる車椅子

メロディにならない口笛が
ひとりぼっちの蓮になる

ほっとみるく
あったかいのは
おとうとが
ミトンをはめて運ぶから

【評】短歌体の作者。日常に潜む違和感を書き留めているようだ。「人魚の手形」「夏の部品」「深海」「蓮」が、日常の意識に突然出現するのだ。

○林が推したが、惜しくも入選を逃した作品、作者。林には入選と何ら遜色はない。

●回る卵●（大学院生）

鏡面を保ちつつ湧く水のように
怒らないけど許さないから

あきさめは
ぎんいろにうたい
はなびらは
ぎんいろにふるえ

水槽の中の土曜日秋曇り

どうして九月は
宇宙と同じ密度なんだろう

朝日射す透明骨格標本の秋

代償も正義もいない水鉄砲

花束の抱きしめ方が分からない

億年を蔵う待ち針春の星

【評】俳句体を中心に、短歌体も書く作者。あるいは作者の意識では川柳もあるか。「水鉄砲」「花束」は川柳としても成立しそうだ。

●松浦もや●(大学生)

墓石を磨くブラシは
花のごとひらいて
朝の中に
佇む

はつなつの
空腹のあるきびしさに
折畳み日傘やわらかく

反る

大欠伸
から帰り来て
会いたい、のこをあなたは
五月雨とよぶ

スプーンの窪みに
舌を沿わせれば
いつか
かなしくなるためのひと

【評】短歌体の作者。圧倒的に作品数が少なかったのが残念。一編一編の完成度は高く今後に期待したい。

○林が推薦しなかったが、入選した人の作品と作者

●高田皓輔●（大学生）

冬晴れにもたれて歩くこのごろの
川はさめざめ出ていくばかり

梨に似た友達を一人知っている

【評】短歌体、俳句体、川柳と表現は多彩。今回は推薦した作者でもある。今回

は、やや理に傾いた感じがあり、巧みさは感じつつ、私には前回より印象に残る作品が少なかったように思う。15篇の選という制約の中で、今回は外させて頂いた。

●青木菓子●（大学生）

ドーナツは欠けて開始の銃が鳴る

以上でも以下でもなくて青葉闇

賞賛の後ふみつぶす蟻地獄

ごぼう切るときだけ思いたす童話

【評】川柳の作者なのだと言いつつ纏めて読んで理解した。俳句読みの癖は、俳句として読んでいたので厳しい判断になった。

○今回は大学生、大学院生のみでの入選となった。注目していて、応募がなくて残念な若い才能がいた。最後に紹介する。

●夏蜜柑●（16歳）

堤防を歩く風光っていても

独特な感性持ち合わせないので

前世はたぶん椋鳥らへん

姿勢だけ整えておく秋時雨

八月のリュック抱えてみんな寝る

夏草に埋まるバス停日の暮れて

蟻塚を壊しもうすぐ百日目

プライドが邪魔で仕方がなくて鯨

ビー玉の皆均等で夏痩せる

【評】注目していた才能であった。応募があれば、高校生だっただろう。道化を演じられるところに才能と余裕を感じさせる。

● 仮野 ● (17歳)

さみしいと

さびしいの湿度の違い

型抜きが

されたクッキー生地のように

地球に映るいきものの影

● 茅野文 ● (15歳)

私
ケーキのいちごが嫌いなんで
ここで
帰ります

「概念」の
木偏でつまずく
わたしです。

呼吸とか、しまししょう。
自由なつもりでね
僕が一番自由だけどねっ！

●ももか●(17歳)

冬麗にメリーゴーランドの鏡

春の閩港町行くバスの揺れ

桜の中
ランドセルは
入学の子の有り余ったちからで
めいっばいふりふりする

●葉ざくら●(15歳)

あうとれつとだからか

雨がすごく寒い

もし人が花蛇と暮らせてゐたら